

【第三種郵便物認可】

民が担う 新聞拓時代

第3部 興す

④

道内の農業生産額(一場の規模や建設時期など兆六百六十三億円、二〇〇五年)の約三割を占める十勝地方の中心都市、帯広。ここに本拠を置く財団法人十勝圏振興機構(とち財団)が二重

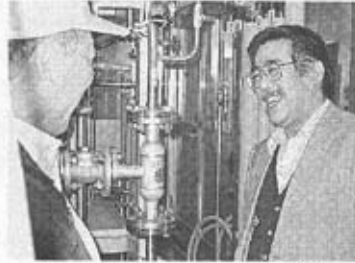
燃料が寒冷地でも使える機構(とち財団)が二重か実証試験を進める。試験結果は良好。全国に先駆けて、二、三年後にも道

道内の農業生産額(一場の規模や建設時期など兆六百六十三億円、二〇〇五年)の約三割を占める十勝地方の中心都市、帯広。ここに本拠を置く財団法人十勝圏振興機構(とち財団)が二重燃料が寒冷地でも使える機構(とち財団)が二重か実証試験を進める。試験結果は良好。全国に先駆けて、二、三年後にも道

十勝圏振興機構・研究開発課長

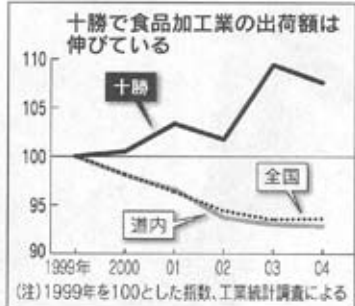
大庭 潔氏

今月十六、十七日。大庭は東京・霞が関の農林水産省にいた。てん菜や小麦を原料にする自動車用燃料「バイオエタノール」の活用は農家が生き残るのに不可欠。大庭の危機感は一いつ補帯広畜産大を卒業後、



メーカーや農家を駆け回る(芽室町のコスモ食品北海道工場)

「農」を「加工」へ飛躍促す



関税は下がる可能性が高くなった。今年年間十五万円。加工して付加価値を高めずして十勝が生き残っているのか、と。夜には居酒屋で、時には農家に上がり込んで、議論をしかけた。普段は寡黙な農家も酒が入ると徐々に本音が出てくる。「実はこんな商品を考えてるんだ」。メーカー出る。出市)はサケ節を使ったしょうゆを製品化した。財団は〇五年費、文部科学省の都市エリア産学官連携事業(三年間)の指定を受けた。未利用の農産物などを使い、健康食品や機能性食材の開発を目指す。コスモ食品(東京)は、大庭と農家の二人三脚が実った一ジャガイモからたんぱく質の一種ペプチドを取り出す研究が進む。

出身地である静岡県の農家も同じはずだ。子メーカーに就職。研究だが当初、意気込みは所々で十年ほど酵素の研究。空回りする。十勝は裕福に携わる。九三年、とかな農家が多い。一戸あたり十勝圏の設立に合せての平均所得は一千万円。転職、余剰作物や、規格以上。「そんな苦勞しなめに合わず廃棄される大量くてもやっつけている」。例、牛乳そのものでジャムを作るアイデアを農場主の新村浩隆(35)が出た。「学」のパートナーは帯広畜産大。地域共同研究セない。(敬称略)



北海道

電話
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111
011-222-1111

